

花葉会の法人化について その目的と経過報告

監 事

田 中 桃 三

今年4月1日付で花葉会は一般社団法人と組織変更をした。

実際にこれから法人としてどのように変わるかと言えば特に運営上の変化はない。ではなぜ法人化の必要があったかと言えば、それは現在ある基金の保有の問題であった。今までのような任意団体では花葉会名義の預金口座を持つことはできない。そこで代表者（会長、理事長）の個人預金として保有されてきた。初期には事務長の名義で預金されていたこともあった。

しかし個人名義であることは相続その他の事実が起きた時面倒なことが起きる。もちろん相続税では団体の財産であることが証明されれば課税されることはないが銀行の名義変更は厄介である。銀行にもよるが相続人全員の印鑑証明や実印の押印が求められ、会とは関係のない方々を巻き込んで日にちも手間もかかる。

実際には現在花葉会でやっている事業は特に法人であるかどうかに関係はあまりない。しかし今後、大学、役所、他の団体などと委託事業や共同事業などを行うことがあれば、法人化していることは絶対的に有利な条件となる。

つまり、花葉会が生き残り発展していくために、必要な新しい事業をするために、必要な要件のひとつとして法人化したわけである。

事業にしても事務にしても法人化しただけで改革できるわけではない。それらはあくまでも当事者のやる気の問題で、単にやりやすいように道ならしをしただけである。

法人化について具体的に考え出したのは、東日本大震災のときの募金の際、コンビニで受け付けるには法人でないと認められないとされたときである。

法人といっても株式会社、公益社団（財団）法人、NPO法人、一般社団（財団）法人、などいろいろある。しかし法人化するにあたりクリアしなければならない条件が3つあった。1は議決権の問題、2は税金の問題、3は基金の問題である。

1については、法人化するにあたって最大の問題であった。すべての法人の最終的意思決定機関は、すべての会員による総会であるが、株式会社などのように出資額（株式数）に対応して議決権が与えられている場合は、その過半数を持っている人の出席で総会は成立する場合が多い。しかしその他の法人では会員の過半数の出席が成立要件となっている。もちろん一部の法人では会員個人にかえて代議員を選出するようになっている場合もあるし、評議員制を採用している場合もある。しかし一般社団法人法にはそのような規定はない。

花葉会の会員数は数百名以上おり、委任状をあつめても過半数の出席は不可能なことはあきらかであった。そこで他の団体の現状などを調べ、実情にあった法人化を考えた。

その結果、旧花葉会の幹事を幹部会員と名をかえて法律上の社員になっていただき、その過半数（委任状出席を含む）の出席で総会が成立することにした。

もちろん実際の総会は今までと同じように開けばよいので、ただそこに幹部会員が過半数（委任状出席を含む）出席されていればよいことになる。当然ここでは、予算、決算の承認、役員承認などを審議することになる。

2の課税上の問題だが、これまで花葉会は税務署に対し、税法上の「人格なき社団」として届けており、セミナーなどの営利事業の申告納税、講師の謝礼の源泉課税などは実施してきた。だが一般社団法人となると原則としてすべての収入が課税対象となり、花葉会では特別会費や会報の広告収入まで課税収入とされるおそれがあり、慎重に調べた。その結果一般社団法人であっても、いくつかの条件が認められれば「非営利型法人」として公益法人と取り扱われることがわかった。

その条件とは利益があったとき会員、役員に分配をしないこと（法人に留保しておくこと）及び解散のとき残った預金等財産を国や地方公共団体、国立大学などの公的機関に寄付すること、役員などに高額な報酬を支払わない、などの条件を定款に記載すればよいとのことであった。

これで税金の問題は解決した。

3は基金のことである。法人化の目的の一つは基金を組み入れることであるが、この処理を誤ると基金全額に課税されることも考えられるが、これについては返還規定を定款に入れることで回避できた。この場合返還先は一般会員となる、但し返還のときは会の解散のときであり、その間の利息はつけないことを記載した。

また基金を毎年取り崩して一般会計に組み入れる件については、総会の決議が必要であることを運営規則に明記した。

以上のように法人化されたわけであるが、いままでのべてきたように、一般社団法人といっても定款の条項は公益社団法人に近いものになっている。これは将来必要があれば、所轄官庁の認可をうけて公益法人となることも視野にいれているのである。公益法人化すればメリットもあるしリスクもある。いずれにせよ花葉会が一般社団法人という道具を最大限に使って、今後ますます発展されることを期待している。